
美術の夏

斬滅のザン&食べられる野草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美術の夏

【Nコード】

N9292T

【作者名】

斬滅のザン&食べられる野草

【あらすじ】

美術部の部室。それって最高のシチュエーションじゃないですか？
少なくとも告白には最良の場所。そんな場所でこんな風な告白がしてみたかった。と言う作者の妄想です。

梅雨を終え夏本場に近付きつつある、六月下旬。高校二年生の俺、
比良^{ひら} 滝祐^{たきひろ}は学校の机に付き伏している。最近はこうやって昼休み
を過ごす事が多くなっていて、”中だるみ”を身をもって体感して
いる気分だ。

「うあゝ……暑うー……」

教室内は仲の良いクラスメイト同士が机をくっ付けて弁当を箸で
つつきながら談笑している。家では中々親とこう言う風に話しながら
食えることが無いのか、昼は決まってクラスメイト達の声のボリ
ュームは大きい。この一時の喧騒をBGMに窓の外へと目を向ける。

燦々と降り注ぐ太陽光は、ジリジリと音を発しても可笑しくない
ぐらいに地面に向かって落ちていく。まあまあ、の広さを誇る我が校
のグラウンドに面するこの教室、さらに窓際最後尾に位置するこの
場所は地獄と言っても過言ではない程に―――暑い。その暑さは、
日本も赤道に有るんじゃないかと錯覚する程だ。まあそんな事は無
いんだけど、この暑さはとても最悪だ。

半袖にただけの制服では全く持って意味が無い。ここは一つ制

服の丈の長いズボンを、半ズボンにしてもいいじゃないだろうか。とも考えてしまいがそれはそれで恥ずかしいので嫌だ。

日本の本土から南に位置する熊本。そんな片田舎の高校には、エアコンなどと言う文明の神器は設備されて居ない。ここから数キロ言った公立高校には有るのだが、如何せんここにそんな物を備え付けられる程の資金が無いのだ。何とも不便である。

「今日もダレてんなー、たちちゃん」

「メシだ、メシー！」

そう言っただけの机に、近くにあった他人の机を一つ強引にくっ付け、購買で人気のパンとジュースを置きながら友達が来る。ちなみに俺のあだ名は”たちちゃん”で統一されている。子供の頃に双子の幼馴染に呼ばれてから何故か小・中・高で言われている。俺は別に気にしていながら良いんだけど。

「お前ら、こんなに暑いのによくそんだけ食うな……」

机に置かれたパンは約十数個と言ったところだろう。その半分は菓子パンで構成されている。この学校のパンは全部が全部購買の店員さんが焼いた物で、その美味しさはこの学校の校長ですら買う程と言う折り紙つき。だが流石にこれだけのパンを買うのは、昼時のこの時間はさぞ戦争だった事だろう。

「いやー、今日は運が良かったただけだ、いつもなら三年が買い占めるけど。今日は三年は講義受けに市内にまでいって来るから」

「あー、そういやーそうだったな」

この時期三年生は資格試験など、専門的な技術の資格をとる人が多い。今日は丁度その講義の日で市内まで足を運んでエアコンの効いた部屋で講師の話を聞いているに違いない。なにせ、こんなクソ暑い教室で授業するよりもマシだろうからな。だから大半の三年生はエアコン目当てと言える。エアコンの中で講義を聞いて資格が取れるなら、断然そっちの方がいいだろうから。

「つてお前はくわねえのか？」

「ああ、いやっコンビニで買って来たから、ほらこの通r……」

鞆のひっくり返して中あるパンを机にひっくりかえ————
——せなかった。鞆からは塵一つも出て来なかった。綺麗な鞆だろ？

「スツカラカンだな」

「ああ、スツカラカンで、俺呆気らんかん」

「座布団一枚」

「あざーっす」

箸で友人Aが友人Bを指して言う。有ろう事か、俺の不幸をネタにして話題にする始末。友人としての倫理は無いのだろうか、こいつらは。

「大喜利すんなっ！　　ってか旨くねェし！！」

「二連続ツツコミ」

「るせつぞ！」

俺は言っただけに付き伏す。俺はいつどこで食い物を落とす様なヘマをしたのか必死に思い出す。今日の朝は普通に起きてコンビニまで自転車でいった。そしてそのまま学校へ行った。だが何も思い出せない。ここは苦肉の策しかない、と俺は決意して友人二人を見る。

「そのパンをください」 「嫌だ」

改行も必要無いぐらいの即答で言われた。友人二人は机の大量のパンにそれぞれ手を伸ばす、そして気にする風もなくパンの袋を開けて中身のパンを噛む。

こ、ここに鬼がおるう……。最低最悪の鬼が二匹も居やがるぞお……。ガツクリと項垂れて俺は机に額を軽く打ち付ける。その打ち付けた痛みが夢じゃない事を証明する。

「はあ……。さいつあくだ……」

午後の授業などまともに頭に入る筈もなく。俺は、半日を空腹で死にそうな思いをしながら過ごした。教師に何度教科書で頭を叩かれたのか記憶に無い。その所為で教室を出る時に異常なめまいを催

してしまった。これは一種の脳障害を起こしてしまったんじゃないだろうか。

「くそお……部活キチィー……」

悪態を吐きながらもゆっくりと廊下の床を上履きで踏みしながら歩く。旧校舎二階の深奥にある美術室。そこが俺、比良滝祐が所属する第二美術部の宛がわれた部室である。

この学校には何故か美術部が合計で四つ存在する。これはこの学校が半年に一度だけ、学校主催の美術コンクールを開催するからだ。そのコンクールで競い合う事をして欲しいからと、先代の校長が美術部を六つも作ったそうだ。だが今では数を減らし四つだけになっている。

そんな我が校の伝統ある行事で優勝すると、部費の増額と確実に大学に進学出来て尚且つ、特待生になる事が出来る。そして一位を獲得為に俺たち第二美術部、略して”二美部”は活動して居る。だが二美部とはある大きな問題を抱えているのだ。

「ちーっす……って誰もいねえか…」

部員が圧倒的に不足しているのだ。殆どの部員は他三つの勢力に取られていて俺たちとはとても部員が少ない。少ないと言うより部員は数えて……二人だけなのだ。この二美部が活動を続けられるのは、校長の伝統保護を信条とした学校構成のお陰だ。

実際俺だって一年の初めに手違いでこの二美部に入る事になったのだ。俺は元々文化系の部活では無く、体育系の部活に入る気でいたのだ。それなのにこんなバリバリの文化系の部活に入ってしまった

たのだ。

「ふう……でもここだけなんだよなあ、扇風機あるの……」

もう一名の部員が持ち込んだ私物で、顧問の教師からも許可を得てここに置かれている。その扇風機に当たりながら、身体からでる汗をどうにか止める。

「はあゝ幸せえ……」

そしてこの私物を持ち込んだ本人は今だ”ココ”に来ていないのか、影も形も、音さえしない。あの人さえいなければ結構好き放題出来るので、俺がこの部に留まっている大きな理由の一つは、それも影響している言えるだろう。

「あゝ。たっちゃん」

間延びした高めのハスキーボイスが耳に入る。でも今日は確か講義を受けに行っている筈。この時間に来るなんておかしい。と言う事は――

「暑さで変な声が聞こえるだけ―――なあっ!？」

「変な声ってなに？ はあちゃん変な声じゃないよ？」

背中に柔らかい感触が押し当てられている。俺は咄嗟に変な事を考えそうになるが、直ぐに首を振って掻き消す。そして背中に居る”もう一人の部員”に遠慮がちな目を向ける。

「あ……あのゝ、先輩？ その、当たってますよ？ ……そのお、胸

が……」

少し言葉に詰まりながら指摘して、ニコニコと笑顔の先輩を見る。少し幼さを残す可愛らしい顔立ち、サラサラとした枝毛の無い綺麗なクリーム色の髪、髪の色よりも濃い色をした瞳、全国平均よりも若干高めの身長、グラマーとは行かなくともそれなりの綺麗なスタイル。性格は温厚で意外に頑固、それでいてマイペースと言うかおっとりと言うか、何を考えているのか分かりにくい。いつもぼけえーっとした顔をしている癖に何でも見透かされる。高校三年生の我が二美部の部長である、御崎^{みさき} 葉月^{はづき}先輩。愛称は”はあちゃん”。

「???」

「あははっ……はあ……」

葉月先輩は何を言われているのか理解していないように首を傾げる。そんな反応に俺はため息を零す。この人と出会ったのが運の尽きなのか、入学してから今まで葉月先輩はこう言ったスキンシップを平気でやって来る天然おっとり系なので、俺の理性は毎回毎回崖の上にある気分だ。

「で？ どうしたんです？ 今日^{きょう}は講演だ^{こうげん}って聞きましたけど？」

「うん？ はあちゃんは言^いってないよ？」

顎に人差し指をあてて首を傾げる先輩。その一つ一つの仕草にどれほど俺が、ドギマギする一年半を過ごして来た事か。だがアレが”素”なのだから、少しは自重を覚えて貰^{もら}いたいものだ。一年の時は俺の前で平気で着替える程に常識がなくなってなかったくらいなのだから。

「え？ でも資格とか必要じゃないんですか？」

「ん？ はあちゃんは、コンクールで優勝するって目標があるから、そんな資格なんていらないよ」

あははは、無邪気な笑みを浮かべながら笑う先輩。この人は進学する気にいるんだな。何だかんだでしっかり進路は決めているみたいだ。少し安心した。

「ふうん。そうなんですか。でも大学って何処行くんですか？ やっぱり美大ですか？」

先輩はこの部に三年間所属してるし、美大に行っても恥ずかしくない技術は持っている。それに絵を描いている時の先輩は普段の三倍以上は活き活きした表情で絵を描いている。そんな先輩の姿は、俺にとって少なからず”憧れ”を抱く対象でもある。

「？ はあちゃんは、行かないよ？」

「え？ 行かないんですか？ じゃあ何で優勝なんて……」

先輩の言葉に驚かずにはいられない。みんな大学に行くために美術部に入って優勝しようとしている、と言っても過言ではない。それに三年生は大学に特待進学出来る権利はこのコンクールが最後。そんなチャンスに挑戦しないなんて。

「思い出だよ♪ たっちゃんとの思い出♪」

「……………」

この人は思い出の為に優勝しようとしているのか？ まさか、そんなワケ……。

「私…ね。……たっちゃんがこの二美部に来てから毎日が楽しかったんだ」

先輩は胸に手をあてて思い出す様に言う。俺だって毎日が楽しかった、それは先輩と居たからだと思う事も今は出来る。ああ、そうか先輩は……。だったら俺も……。

「でもね、いつも絵しか描いてなくて。あんまり思い出らしい思い出ってなかったんだよね」

「そうですね、いつも絵を描くだけに土日も来て描いてました」

殆ど毎日この教室に来ては絵を描いて、先輩と談笑して、そんな日常へと一体化した緩やかな日々を過ごして居た。

「コンクールコンクールで絵を描いてばかり。でも、それが嫌だってワケじゃないんだよ。それでもいいなあ、って思ってたんだ」

「ええ、俺もそれで…そんな日々には満足してました」

俺もそんな日常が平凡へと馴染んでいく日々が溜まらなく好きだった、今でも好きだ。

「でもね、この前思ってたんだ」

「何をですか？」

今日からまた新しい日常が始まる――――

「たっちゃんがね、比良滝祐くんが――――好きなんだ」

「奇遇ですね俺も丁度――――御崎葉月さんが好きなんですよ」

――――そして新しい日常を平凡へと馴染ませる。

「えへへ。相思相愛だね」

「かも知れませんね」

「むうー、酷いなあー」

「俺って、好きな女の子にちょっかい出すタイプなんつすよ。まあSですね」

「私はそう言うの分かんないな」

「簡単に分かる方法がありますよ。試してみますか？」

「ええーホント？ やるー♪」

「では遠慮なく――――」

「――――んう……………ファースト、キス…」

「俺もです……これで先輩は受ける側のMですね…」

「むうー……」

(後書き)

なんとなく書いた作品です。

特に意味は無いッスW W

でもこんな先輩居たら最高の学校生活だと思いますねー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9292t/>

美術の夏

2011年10月7日16時12分発行